

アンダルスの失われた手写本
ムクタビス第2巻

佐藤 健太郎

1995年5月31日、長らくスペインのアラブ・イスラーム研究者たちの頂点に君臨してきたガルシア・ゴメス Emilio García Gómez が死去した。6月4日に90歳の誕生日を迎える、ほんの数日前のことである。彼の蔵書は王立歴史アカデミー Real Academia de la Historia に寄贈されることとなり、弟子のバルベ・ベルメホ Joaquín Vallvé Bermejo がその整理の任にあたった。やがて彼は、故人の蔵書の中から、書類入れの中におさめられた手写本を発見することになる。失われたと思われていた『ムクタビス第2巻』前半部の再発見である⁽¹⁾。

最近、この貴重な手写本のファクシミリ版およびスペイン語訳が相次いで出版された。そこで、手写本のたどった数奇な顛末とあわせて、この両者について紹介したい。

* * *

『ムクタビス *Al-Muqtabis*⁽²⁾』は、アンダルス（イスラーム・スペイン）史、とりわけ10世紀までの後ウマイヤ朝期を扱う際の最重要史料のひとつである。一部散逸しているために全体像は不明だが、8世紀のアンダルス征服から11世紀初頭の後ウマイヤ朝の内乱・崩壊の直前までを対象とする年代記であると考えられている⁽³⁾。著者イブン・ハイヤーン Ibn Ḥayyān, Abū Marwān Ḥayyān b. Khalaf (377/987~469/1076) は、アブド・アッ＝ラフマーン1世の後ウマイヤ朝建国を助けたマウラーの子孫で、代々王朝に仕える家系に生まれた。彼自身も後ウマイヤ朝の崩壊期にあって一貫して親ウマイヤ家の姿勢をとっており、自らウマイヤ家再興に奔走したこともあるほどである。このような彼自身の明らかにウマイヤ家寄りの立場にもかかわらず、『ムクタビス』そのものは、ラーズィー Aḥmad al-Rāzī (d.344/955) らの手になる既に散逸した著作を忠実に引用しているために、後ウマイヤ朝期の基本史料とされている。その情報量の豊富さは、他の現存する史料の及ぶところではない。それゆえに、まさに「『ムクタビス』の新たな手写本が世に出るたびに、アンダルスの歴史は変わってきた⁽⁴⁾」のである。

しかし、残念ながら、全10巻とも言われる『ムクタビス』のうち、現在我々が手にすることができるのは、その半分にも満たない。これまでに知られていたのは、第2巻の後半部⁽⁵⁾、第3巻の後半部⁽⁶⁾、第5巻の大部分⁽⁷⁾、第7?巻の一部⁽⁸⁾の都合4つの手写本だけである。今回、失われていた手写本とが再発見されたことで、ハカム1世の治世(180/796~206/822)からアブド・アッ=ラフマーン2世の治世前半(206/822~232/847)を扱った第2巻の前半部が、これに加わることになる。

* * *

そもそも『ムクタビス第2巻』の手写本は、フェスのカラウィーイーーン・モスクの蔵書の中から、フランス人のアンダルス研究者レヴィ=プロヴァンサル Evariste Lévi-Provençal が発見したものである。おそらく1938年より少し前のことと思われる⁽⁹⁾。発見の経緯は評者には詳らかではないが、アルジェ生まれの彼は、まだ20歳代の1910年代からラバトで研究に従事し、モロッコ各地から数々の重要な写本を発掘して校訂・出版している。一方で、ラバトのモロッコ高等研究所 Institut des Hautes Etudes Marocaines の運営やその機関紙 *Hespèris* 創刊に深くかかわるなど、フランス保護領下でのモロッコの学術活動の組織化に重要な役割を果たした人物でもある⁽¹⁰⁾。『ムクタビス第2巻』手写本の発見も、このようなフランス植民地支配下で組織的に進められた研究活動と無縁とはいえないだろう。なお、この時に彼が発見し得たのは、『ムクタビス第2巻』の前半部に過ぎない。本来は同じ一つの手写本を構成していたはずの後半部が同じくカラウィーイーーン・モスクにあることが知られたのは、もう少し後のことである。そのため、レヴィ=プロヴァンサルは、主著『ムスリム・スペイン史 *Histoire de l'Espagne musulmane*』執筆時にこの手写本を利用できなかったことを後に嘆いている⁽¹¹⁾。

ともあれ、『ムクタビス第2巻』前半部の手写本の存在を知ったレヴィ=プロヴァンサルは、これをカラウィーイーーン・モスクから借り出し、自らのアンダルス研究に利用することになる。その成果が、彼の主著『ムスリム・スペイン史』中のハカム1世及びアブド・アッ=ラフマーン2世を扱った部分である⁽¹²⁾。また、コルドバの大モスクの拡張工事およびピレネー西部のナバーラ王国の成立に関する記事については、部分的な校訂を公にしてもいる⁽¹³⁾。特に後者は、ナバーラのバスク人とエブロ川流域のムスリム勢力との密接な関係を明らかにしており、キリスト教徒側の史料が伝えない貴重な情報を含むものである。

このような部分的な校訂からも明らかのように、レヴィ=プロヴァンサルが、史料として『ムクタビス第2巻』前半部の手写本を利用すると並行し

て、その校訂版をも準備していたことは間違いない。彼自身の記述や『ムクタビス第2巻』後半部の校訂者マッキー Mahmūd 'Ali Makki によると、彼は1938年頃からアレクサンドリア大学を通しての出版を意図しており、手写本のフォトコピーなどもアレクサンドリアに送られていたようである⁽¹⁴⁾。しかし、結局、出版は実現しないまま1956年にレヴィ＝プロヴァンサルは死去し、以後、この手写本の消息は絶えてしまった。マッキーは、カラウィーイーン・モスクに残されていた後半部の校訂を出版するに先立って、失われた前半部を求めてアレクサンドリア大学やレヴィ＝プロヴァンサル夫人らにも問い合わせたが、結局何も分からないままだったという⁽¹⁵⁾。

以後、失われた手写本については、「エジプトに住むレヴィ＝プロヴァンサルの縁者の女性が手写本を隠し持っているらしい」といった類の様々な「伝説」が、時に無責任な尾ひれを付け加えながら、アンダルス研究者の間で語られることになる。あるいは、アレクサンドリア大学の教員ナビーラ・ハサン Nabila Hasan の手元に手写本の写しがあることが明らかになり、スペインの研究者から彼女に対して「学界全体のために」手写本の公開が呼びかけられたこともあった⁽¹⁶⁾。しかし、肝心の手写本の行方は、故ガルシア・ゴメスの旧蔵書から再発見されるまで、知られないままだったのである。

* * *

行方不明となった手写本が、どういう経緯でガルシア・ゴメスの手に渡っていたのかは、よくは分からない。ただ、彼とレヴィ＝プロヴァンサルとが相当に親しかったことはよく知られている⁽¹⁷⁾。実際、『ムクタビス第2巻』についても、二人の協力により、その一部分の校訂・翻訳が発表されたことがある⁽¹⁸⁾。したがって、『ムクタビス第2巻』の手写本が何らかの理由でレヴィ＝プロヴァンサルからガルシア・ゴメスの手に渡っていたこと自体は、決して不思議なことではない。問題は、なぜそれが半世紀近くも世に知られぬまま、彼の手元にあり続けたかである。

彼がどのような思いで手写本をひそかに手元に置き続けたのかは、もはや知る由もない。そこでここでは、ガルシア・ゴメス存命中のスペインのアラブ・イスラーム研究者たちをとりまいていたある種の雰囲気についてだけ、指摘しておきたい。その際、もっとも示唆的なのが、同じく『ムクタビス』の手写本のうち、スペイン王立歴史アカデミー所蔵の第7?巻の校訂・出版をめぐる1960年代の「スキャンダル」である。

問題の手写本は、19世紀末にスペインの手写本調査隊がアルジェリアのコンスタンティーヌで発見した手写本を筆写したもので、調査隊帰還後、王立歴史アカデミーに収められたものである。コンスタンティーヌの原本の方はその後失われたため、現在ではこれが唯一の手写本となっている。この手写

本は、1965年になってイラクのハッジー ‘Abd al-Raḥmān ‘Ali al-Ḥajji によって校訂・出版されるのだが、これにひどく憤慨したのが、王立歴史アカデミー会員のガルシア・ゴメスである。実は、彼自身も同じ手写本の校訂を準備していたのだが、ハッジーに先を越されたために、やむなくスペイン語訳を出版することになる。そして、その序文の中で、彼は以下のように恨みつらみを露骨におちまけているのである。

「このマドリードの手写本は、スペイン人によってスペインで校訂されるはずだったのだ。ところが、どこかで悪魔がたくらみをめぐらしていたのである。」

「ヨーロッパに所蔵されていたりヨーロッパ人により研究されたりしているアラビア語手写本を“精緻に研究”することが、“ナショナリズム”と結びつくと、中世の捕虜救出さながらの手柄となってしまうのである、もっとも救われた捕虜はすぐにうち捨てられてしまうのだが⁽¹⁹⁾。」

「このような手写本の争奪が、王立歴史アカデミー所蔵の手写本（これはプライベートなコレクションのはずである）に、しかもアカデミーの最古参メンバーの一人のためにとっておかれていた手写本にふりかかるとは誰が想像出来たろう⁽²⁰⁾」

以後、スペインのアラブ・イスラーム研究者の間では、もっぱらガルシア・ゴメスのスペイン語訳のみが利用され、最近になるまで、論文の註にハッジーの校訂版が現れることはほとんどなかった。こんなところから、「スペインの歴史」を記す『ムクタビス』に対するガルシア・ゴメスのこだわり、学界の第一人者・実力者としてのガルシア・ゴメスの自負、そしてそれに追随する当時の他の研究者たちの姿がうかがえる。『ムクタビス第2巻』前半部ほどの重要な手写本を一人の実力者が独占し得たのは、ガルシア・ゴメス一人のエゴだけではなく、このようなかつての学界全体の風通しの悪さも背景の一つとして指摘しなければならぬだろう⁽²¹⁾。今回の手写本の再発見者バルベ・ベルメホはガルシア・ゴメスの高弟の一人だが、師の晩年の言葉のしばしから、失われた手写本は実は彼の手元にあるのではないかと以前から疑っていたという⁽²²⁾。それにもかかわらず、手写本のありかが明らかになるには、彼の死を待たなければならなかったのである。

* * *

今、我々は『ムクタビス第2巻』前半部とようやく向かい合えるようになった。この貴重な史料がもたらす新たな知見については、今後、様々な観点から検討が加えられることになろう。ここでは、評者の目にとまった限りで3点だけ紹介したい。第一は、バレンシア地方のベルベルに関する記述である。これは、80~90年代にかけて時には感情的なまでの論争が繰り広げられたテ-

マで、アンダルスの特に農村地帯におけるベルベル的要素の重要性を唱えるギシャール Pierre Guichard がバレンシア地方の「ベルベル化」を主張するのに対して、アンダルスの都市的・アラブ的な性格を強調するデ・エパルサ Mikel de Epalza らが初期のバレンシア地方へのベルベルの移住を否定したものである⁽²³⁾。これに関して『ムクタビス第2巻』には以下のようにある。「(王位を狙うハカム1世の大叔父アブド・アッラーフは) バレンシアのベルベルたちのもとに身を落ち着けた。ベルベルたちはアブド・アッラーフと結び、反乱を起こした wa nazala bi-kūrat Balansiya 'inda al-Barbar fa-qāmū wa-ta-aṣṣabū la-hu⁽²⁴⁾」。もちろんこれだけで、バレンシアの「ベルベル化」を論証できるものではないが、少なくともベルベルが8世紀末のかなり早い時期から大きな存在感をこの地方に持っていたことはうかがえる⁽²⁵⁾。

次に、ハカム1世の寵臣、テオドゥルフォの息子ラビーウ Rabi' b. Tudluf というキリスト教徒の記述である。彼については、①キリスト教徒を管轄するクーミス qūmis (ラテン語の comes=伯に由来する語)の地位にある、②ムスリムに対してもイスラーム法の規定にない徴税を担当する、③外国人奴隷からなるフルス khurs (アラビア語を知らない唾者の意)軍の指揮をする、といった役割が知られていたが、それに加えて『ムクタビス第2巻』には、「ハカム1世の家政と私事の担当者 al-mustawli li-qahramat al-amir al-Ḥakam wa al-umūr-hu al-khāṣṣa⁽²⁶⁾」とある。当時のラビーウの権勢とともに、君主の家政と国家とが未分化な初期の後ウマイヤ朝の統治のあり方をよく示している例だと思われる。

最後に、太陽暦(ユリウス暦)にしたがっておこなわれる新年祭 yannayr と夏至祭アンサラ 'anṣara の記述である。マグリブ・アンダルスの民衆の間では、イスラームの二大イードとは別にこの二つの祭りがさかんで、しばしば法学者の非難の的となっていたことはすでに知られている⁽²⁷⁾。これについて『ムクタビス第2巻』には、アブド・アッ=ラフマーン2世がバグダードから著名な音楽家ズィルヤブ Ziryāb を迎えた際、毎月の手当てに加えて「二大イードに際してそれぞれ千ディーナール、ミフラジャーン(アンサラに対するベルシア語起源の別名)とナイルーズ(同じくヤンナイルの別名)に際してそれぞれ五百ディーナール li-kull 'id alf dinār wa li-kull mihrajān wa nayrūz khamsmi'a dinār⁽²⁸⁾」を与えたこととある。ここから、市中のみならず宮廷においても、ヤンナイルやアンサラがイスラームの二大イードと並んで、アンダルスの年中行事として定着していたことがうかがえる。

* * *

今回出版されたファクシミリ版・スペイン語訳版の体裁についても、述ベ

ておこう。ファクシミリ版については、手写本のカラー写真はきわめて鮮明で、版型も大きく（ほぼA4サイズ）、非常に読みやすい。手写本再発見の経緯を記した序文に続いて、簡単な目次がついているので、これだけでも自分の読みたいところをある程度は検索することができる。一方、スペイン語と訳の方は、現在のスペインにおけるアラビア語学の第一人者と目されるコリエンテ Federico Corriente によるものである。『ムクタビス第2巻』後半部の校訂者マッキーの名も共訳者として挙がっているが、どちらかというとな協力者的な立場らしい。人名索引・地名索引に加えて、年ごとの出来事の要約も巻末に付され、便利である。もちろん、写本のフォリオ番号も付されている。註も充実しており、わずかな月間で準備したとは思えない出来である。ただし、アラビア語の転写は、言語学の専門家らしく独特のもの（ハムザは？、アインは？など）なので、最初は戸惑う向きもあるかもしれない。

* * *

ともあれ、失われた手写本は、再び日の目を見ることになった。いや、レヴィ＝プロヴァンサルの手元にあった時ですら、この手写本を参照できたのはガルシア・ゴメスのような彼の親しい友人だけだったのだから、ファクシミリ版の出版によって、はじめて広く研究者が利用できるようになったというべきかも知れない。

この数十年間、『ムクタビス第2巻』前半部は、レヴィ＝プロヴァンサルとガルシア・ゴメスの二人の大家に独占されてきた。あるいは、その内容については、我々は、レヴィ＝プロヴァンサルが『ムスリム・スペイン史』の中で示した彼自身の解釈に従うしかなかった。現在のスペインの代表的なアラブ・イスラーム研究者の一人マリン Manuela Marín が手写本のファクシミリ版出版によせて述べたように、「過去についてのテキストを所有するということは、とりわけ、そのテキストから他にはないような知見を得ることができる場合には、それは現実を所有するというに他ならないのである⁽²⁹⁾」。現在、この手写本の校訂は、再発見者のバルベ・ベルメホにより準備されているという。ただ、大ベテランの研究者ではあるものの、「ベルベル＝蛮族すなわち西ゴート」のようないささかエキセントリックな持論を持つ彼が手写本の字句をどう読んでくるのか、実は評者は一抹の不安を感じている⁽³⁰⁾。その意味で、いささか皮肉な言い方にはなるが、バルベ・ベルメホ自身が校訂に先立ってファクシミリ版出版の労をとり、広く研究者全体にテキストの解釈への道を開いてくれたということに、評者は心底から敬意を表したいと思う。なにしろ、この手写本は長い間、二人の大家に独占され続けていたのだ。今度は、我々一般の研究者にも、手写本の一字一句に至るまで議論する機会が与えられてもいいではないか。

註

- (1) この間の経緯については、ここで紹介するファクシミリ版の序文を見よ。Ben Haián, *Muqtabis II*, J. Vallvé Bermejo ed., p.IX-X.
- (2) 完全なタイトルは不明である。現存する手写本に見られるタイトルも、*Al-Muqtabis* の後に続く語は、手写本により異同がある。そもそも *Al-Muqtabis* と能動分詞で読むか、*Al-Muqtabas* と受動分詞で読むかも議論が分かれるが、総じて前者をとる研究者が多いようである。
- (3) 『ムクタビス』とその著者イブン・ハイヤーンについては、第2巻後半部の校訂に付された マッキー Maḥmūd ‘Ali Makki による序論が最も詳しい。Ibn Ḥayyān, *Al-Muqtabas min abnā’ ahl al-Andalus*, Maḥmūd ‘Ali Makki ed., Beirut: Dār al-Kitāb al-‘Arabī, 1973, pp.7-159. 他には、Luis Molina, *La Crónica anónima de al-Nāṣir y el Muqtabis de Ibn Ḥayyān*, *Al-Qanṭara*, 7, 1986, pp.19-29; Pedro Chalmeta, *Historiografía medieval hispana: arabica*, *Al-Andalus*, 37, 1972, pp.353-404; Emilio García Gómez, *A propósito de Ibn Ḥayyān. resumen del estado actual de los estudios Ḥayyānīes con motivo de una publicación reciente*, *Al-Andalus*, 11, 1946, pp.395-423などを見よ。
- (4) Manuela Marín, *El «Halcón maltés» del arabismo español: el volumen II/1 de al-Muqtabis de Ibn Ḥayyān*, *Al-Qanṭara*, 20, 1999, p.544.
- (5) カラウィーイーーン・モスク (フェス) 所蔵手写本。アブド・アッ＝ラフマーン2世の治世後半 (232/847～238/852) とムハンマド1世の治世 (238/852～267/880) を扱う。本来は、今回紹介する第2巻の前半部と、同じ一つの手写本を成していたものである。校訂版は、Ibn Ḥayyān, *Al-Muqtabas min abnā’ ahl al-Andalus*, Maḥmūd ‘Ali Makki ed., Beirut: Dār al-Kitāb al-‘Arabī, 1973.
- (6) ボドレイアン図書館 (オクスフォード) 所蔵手写本。アブド・アッラーフの治世のうち275/888～300/912年を扱う。校訂版は、Ibn Ḥayyān, *Al-Muqtabis, tome troisième. chronique du règne du calife Umayyade ‘Abd Allāh à Cordoue*, Melchor M. Antuña ed., Paris: Paul Geuthner, 1937.
- (7) モロッコ王立図書館 (現ハサン図書館 al-Khizāna al-Ḥasaniya, ラバト) 所蔵手写本。アブド・アッ＝ラフマーン3世治世の前半にあたる300/912～330/941年を扱う。校訂版は、Ibn Ḥayyān, *Al-Muqtabas V de Ibn Ḥayyān*, Pedro Chalmeta, Federico Corriente & Maḥmūd Ṣubḥ ed.,

Madrid: Instituto de Hispano-Árabe de Cultura, 1979.

- 批評と紹介 佐藤
- (8) スペイン王立歴史アカデミー（マドリード）所蔵手写本。ハカム 2 世治世末期の360/971～364/975年を扱う。現時点では第7巻とされることが多いが、手写本の冒頭、末尾ともに欠落しており、実際のところ第何巻にあたるのかは、まだ確定されていない。校訂版は、Ibn Ḥayyān, *Al-Muqtabas fi akhbār balad al-Andalus*, ‘Abd al-Raḥmān ‘Alī al-Ḥajjī ed., Beirut: Dār al-Thaqāfa, 1965.
- (9) Evariste Lévi-Provençal, *Histoire de l’Espagne Musulmane*, 3 vols, Paris: Maisonneuve, vol.1, p.151, n.1には、1938年に校訂を終えたとある。一方、Evariste Lévi-Provençal, Du nouveau sur le royaume de Pampleune au IXe siècle, *Bulletin Hispanique*, 55, 1953, p.6には、約15年前にこの手写本を見つけたともある。
- (10) レヴィ＝プロヴァンサル生涯については、ガルシア・ゴメスによる死亡記事を見よ。Emilio García Gómez, E. Lévi-Provençal (4 enero 1894-23 marzo 1956), *Al-Andalus*, 21, 1956, pp.i-xxiii.
- (11) E. Lévi-Provençal, Du nouveau sur le royaume de Pampleune au IXe siècle, p.6.
- (12) E. Lévi-Provençal, *Histoire de l’Espagne musulmane*, 1, pp.150-277.
- (13) Evariste Lévi-Provençal ed., Les citations du Muqtabis d’Ibn Ḥayyān relatives aux agrandissements de la grande-mosquée de Cordoue au IXe siècle, *Arabica*, 1, 1954, pp.89-92; Evariste Lévi-Provençal ed, Emilio García Gómez tr., Textos inéditos del 《Muqtabis》 de Ibn Ḥayyān sobre los orígenes del reino de Pamplona, *Al-Andalus*, 19, 1954, pp.295-315.
- (14) Ibn Ḥayyān, *Al-Muqtabas min abnā’ ahl al-Andalus*, M. Makki ed., 1973, p.148; E. Lévi-Provençal, *Histoire de l’Espagne musulmane*, 1, p.151, n.1. なお、レヴィ＝プロヴァンサル自身は校訂は完了したと記しているのに対して、マッキーはアレクサンドリア大学との交渉は、未完の校訂への協力を求めているためではないかと推測している。
- 第八十五卷 (15) Ibn Ḥayyān, *Al-Muqtabas min abnā’ ahl al-Andalus*, M. Makki ed., p.148.
- 一〇一 (16) María Jesús Viguera Molíns, Crónicas de al-Andalus. 1. Manuscritos, *Qurtuba*, 2, 1997, pp.327-330. かつてレヴィ＝プロヴァンサルがアレクサンドリア大学に送付した手写本のフォトコピーを、アレクサンドリア大学の図書館で発見したものらしい。それが手写本の全てにあたるの

か、それとも一部だけなのかは不明である。

(17) 二人の交友については、註10に挙げたガルシア・ゴメスによるレヴィ＝プロヴァンサルの死亡記事が詳しい。

(18) 註13参照。

(19) ガルシア・ゴメスと1950～60年代のアラブ・ナショナリズムとのかかわりは、あらためて検討するに値するテーマであると思われる。彼は、イラク革命前夜の1958年に、フランコ政権から大使としてバグダードに派遣され、1960年までの在任中に革命の混乱や一部の革命派将校との確執を経験している。cf. Ramón Villanueva Etcheverría, *La Primera embajada del profesor García Gómez (Selección de sus Despachos y Cartas al Ministro Castiella de 1958 a 1960)*, 2vols., Madrid: Agencia Española de Cooperación Internacional, 1997-8.

(20) Ibn Ḥayyān, *Anales palatinos del califa de Córdoba al-Hakam II, por 'Īsā ibn Ahmad al-Rāzi (360-364 H. = 971-975 J.C.)*, Emilio García Gómez tr., Madrid: Sociedad de Estudios y Publicaciones, 1967, pp.14-15.

(21) 「スペイン」という枠組みへの過度のこだわり、権威主義、国際性のなさなど、かつてのスペインのアラブ・イスラーム研究者たちが抱えていた様々な問題点については、既に今から10年前の時点でマリナーが指摘している。Manuela Marín, *Arabistas en España: un asunto de familia, Al-Qanṭara*, 13, 1992, pp.379-393.

(22) Ben Haián, *Muqtabis II*, J.Vallvé Bermejo ed., p.IX.

(23) この論争の要点を簡潔にまとめたものとしては、以下を見よ。Thomas F. Glick, *From Muslim Fortress to Christian Castle. Social and Cultural Change in Medieval Spain*, Manchester: Manchester University Press, 1995, pp.31-37.

(24) Ben Haián, *Muqtabis II*, fol.88v; F. Corriente tr., p.16. それに続く Ben Haián, *Muqtabis II*, fol.89r; F. Corriente tr., p.17にも同じくバレンシアのベルベルの記述がある。

(25) ギンシャル自身も最近出版された自著のスペイン語訳への序文の中で、フランス語原著(1990-1年刊)執筆時には利用できなかった新たな知見のひとつとして、この記述に言及している。Pierre Guichard, *Al-Andalus frente a la conquista cristiana: los musulmanes de Valencia (siglos XI-XIII)*, Josep Torró tr., Madrid: Biblioteca Nueva, 2001, p.13.

(26) Ben Haián, *Muqtabis II*, fol.115r; F. Corriente tr., p.89. ラビウについては、E. Lévi-Provençal, *Histoire de l'Espagne musulmane*,

- 1, pp.164-166, 190, 196-7; 安達かおり『イスラム・スペインとモサラベ』、彩流社、1997、pp.65-67を見よ。
- (27) Fernando de la Granja, Fiestas cristianas en al-Andalus (Materiales para su estudio), *Al-Andalus*, 34:1, 35:1, 1969-70, pp.1-53, 119-42; 佐藤健太郎「北アフリカの季節の祭り」、地中海学会編『地中海の暦と祭り』、刀水書房、2002年、pp.126-129。
- (28) Ben Haián, *Muqtabis II*, fol.149v; F. Corriente tr, p.199.
- (29) M. Marín, El «Halcón maltés», pp.548-549.
- (30) 彼の『ムクタビス第2巻』の読み方の一端は、すでに Joaquín Vallvé Bermejo, La Primera década del reinado de al-Ḥakam I (796-806), según el Muqtabis de Ben Ḥayyān, *Anaquel de Estudios Árabes*, 12, 2001, pp.769-778にもよくあらわれている。

Ben Haián de Córdoba, *Muqtabis II. Anales de los emires de Córdoba Alhaquém I (180-206H./796-822J.C) y Abderramán II (206-232/822-847)*, Joaquín Vallvé Bermejo ed., Madrid: Real Academia de la Historia, 1999.

Ibn Ḥayyān, *Crónica de los emires Alḥakam I y ḤAbdarrahmān II entre años 796 y 847 [Almuqtabis II-1]*, Federico Corriente & Maḥmūd ‘Alī Makkī tr., Zaragoza: Instituto de Estudios Islámicos y del Oriente Próximo, 2001.